

## 若い教師のために⑭

### 読む力

学力研常任委員 深沢 英雄

#### 一、本を読まない

通勤の電車の中を見てみると、新聞・本を読んでいる人がいません。新聞を広げている人を見ると懐かしく感じます。つい少し前までは、新聞を大きく広げている人の事を鬱陶しく思ったこともありましたが、今は、ほとんどの人が、スマホを見ています。イヤホンをして2つのスマホを交互に見ている人もいます。

大学の講義で、学生に最近読んだ本を聞いてみました。「漫画しか読んだことない」「四年生だが、大学に入学して、本は一冊も読んでいない。ゼミの時は先生がプリントを用意してくれるから」などと答えます。教師を指している子です。全くと言っていいほど、本を読まない学生が三割ほどいました。きちんとした本に限定すれば、半分以上が読書の習慣を持っていません。あ

る学生が「源氏物語」を最近読んだと答えたので「おっ。そういう学生もいたんだ。すごいな。」と思って聞いてみると、「今とっているゼミのテキスト」と答えたのです……。

#### 二、「問い」を持ちつつ読む

本をまず読みが必要ですが、力がつく本の読み方は、「問い」を持ちながら読んでいくことです。本を読むことで、知識は十分に身につけることができます。知識が多いに越したことはないですが、知識は思考のための材料です。知識を用いて考える事ができなければ、ただの物知りに終わってしまいます。

書き手は、しゃべりませんが、書いていく言葉は、読者にとって、先生になってくれるのです。頭の中で、書き手という先生と問答しながら読んでいきます。

本からより深く学ぶためには、大事な箇所は、線をひくことです。横に、自分の考えも書き込みます。実際に線を引くときには、勇気がいります。自分自身の価値観や判断がそこに表れ、印として残ってしまうからです。この一回一回の積み重ねが本を読む力を鍛えるのです。

本を自分のものにするということは、本の中に自分にピンとくる文章を見つけていくことです。一つもピンとくるところがなければ、その本は自分に縁がなかった。本を読んでいくと、きつと共感できる文章に出合うことがあります。

特に気に入った言葉や文は本の題名とそのページ数と一緒に、ノートに書くか、パソコンに打ち込んでいきます。そうすれば、この本のどこにその言葉があったのか、すぐに分かります。「これはすごい本だ」と思ったら、かなり丹念に写すので、書く量が増えます。この蓄積が、自分にとっての理論的な骨格になります。時間をかけただけの力がつきます。読みっぱなしにすると伸びていきません。

#### 三、読書の目的別分類

読書には二種類あります。「楽しみとしての読書」と「役に立つ読書」です。「楽しみ読書」は、笑う・感動する・どきどきする・励まされる等の効用があります。役に立つ読書は、本を読みことから得た情報や知識を実際に活用するための読書です。教師の読書は、偏ることがあります。いい授業がしたい、良い学級づくりがしたいと思いい、ネタや実践方法、教育技術、著名な先生が書いた「教育書」ばかり読む先生。学校での仕事で教育のこと考えているから、「教育関係の本」は読みたくないという先生もいます。

教師にとつての読書は、技術やネタなど、即役立つ本も読まないといけません。しかし、それだけでは、学校教育の世界という狭い世界の中だけの「問い」になります。社会の中の学校教育と捉えた時に、学校教育以外の視点からの学習が必須です。スポーツや芸術の世界を見ると、学校教育にも通じる点が多くあります。また、経済・哲学・政治・歴史・心理学・脳科学・ビジネスなど様々な分野の本を読むことで、幅広い世界から学校教育を見直してみることが

できます。新たな「問い」を見出せます。好きなものばかり食べていると栄養が偏るのと同じです。教師は、本という栄養をバランスよくとって欲しいものです。

#### 四、理論書と実践書

大学時代は、実践的な本ではなく、理論的な本や論文をテキストにして勉強したことが多かったと思います。現場に入ると、明日の授業のために途端に実践書ばかりを読んてしまいます。

孫子の言葉に「理より入るもの上達早く、鍛練より入るもの上達遅し」とあります。「理」とは理論です。「鍛練」とは「実践」です。理論を学んで実践するほうが、実践した後には理論を学ぶものよりも、ずっと上達が早いというのです。どっちが早い遅いよりも、私は、理論と実践の往還が大事だと思います。

理論のない教師は闇の中にいるのと同じです。理論を学ぶことは「暗闇」のなかに光を点すことになります。

教師は毎日、実践していますが、理論がないと自分の実践を評価できません。今やっていることの意味や今起こっていること

の背景がとらえられません。だから、どうすればいいのかの方針も立てられないのです。理論を知っていれば、実践を総括し、なにをしなければならぬか、どの方向にすすめばいいのかがわかります。この「わかる」ということが大切です。たとえば、できなくてもわかっていることが大事なのです。理論どおりになくても、「こうあるべきだ」ということを知っていれば、いつの日にか、そこにいくことができます。あるべき姿を知らなければ永久にそこには辿りつけないのです。

落とし穴は、「理論は知っているが、実践がとまなわぬ」ことがおこります。「頭でっかちな人」です。理屈ばかり言う人もいます。人間は多かれ少なかれ認識と実践の間に大きな落差があるものです。「わかつちやいるけど」できない。それが人間です。

だからこそ、本で読んだことを実践して試し、また、理論に立ち返るといいう「いつたり来たり」の試行錯誤の中で、一步一步ステップアップしていくのです。

いっぱい本を「読み」、いっぱい実践していきましょう。